

放射線の健康影響に係る研究調査事業 令和6年度年度報告書

研究課題名	環境省「ぐるぐるプロジェクト」におけるプロジェクトレビューに関する研究
令和6年度研究期間	令和6年4月1日～令和7年2月28日
研究期間	令和5年度～令和6年度（2年目）

	氏名	所属機関・職名
主任研究者	アミール 偉	福島県立医科大学医学部放射線健康管理学講座・助教
分担研究者		
若手研究者		

キーワード	放射線の健康影響、遺伝的影響、ぐるぐるプロジェクト、
-------	----------------------------

本年度研究成果
I 研究背景 2021年7月、環境省は福島原発事故に起因する放射線の健康影響に係る誤解・差別・偏見・風評をなくす「ぐるぐるプロジェクト」をスタートさせた。全体の目標として「現在の放射線被ばくで次世代への健康影響が福島県民に起こる可能性が高いと考える人の割合を、2020年の40%から2025年度末までに20%（半減）とすること」を掲げているが、2022年に環境省が公表した調査結果では、プロジェクトのスタートから約一年経過の後、その割合がほとんど変わっていないことが明らかになっている¹⁾。 目標達成に向けて毎年戦略を更新（政策を修正）しながら、プロジェクトを継続していくためには、科学的な証拠（エビデンス）を基にした議論（EBPM：Evidence Based Policy Making：証拠に立脚した政策形成）が必要である。そのためには、実際の参加者へのインタビューを通じた、前年度までのプロジェクトの効果が含まれると考えられるが、実際にプロジェクトに参加した人が、セミナー等への参加を通じて何を得られたか、またどのような思考の変化や行動変容があったかについては、ほとんど明らかになっていない。 II 目的 そこで本研究では、（1）「ぐるぐるプロジェクト」への参加者に対するインタビューなどを通して、プロジェクトのEBPM推進に資するデータ（参加者の目線での印象、行動変容、意識（参照点）の変化、参加者の周囲への二次的な効果など）を明らかにする。また、（2）学術的な視点から「ぐるぐるプロジェクト」を捉え、活動や効果を分析してまとめ、今後のリスコミに資する情報の提供、および論文（アーカイブ）化を行う。 III 研究方法 令和4年度の「ぐるぐるプロジェクト」ラジエーションカレッジセミナーに参加した高校生の保護者

4名、および令和5年度の「ぐるぐるプロジェクト」ラジエーションカレッジセミナーに参加した13名へ実施したインタビューの文字起こし文面を、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチにて解析（テキスト分析）し、その傾向や特徴をまとめた。一部の参加者には、セミナーの前後において、大阪大学の平井班が開発した、放射線に対する意識を持つ人のセグメント分析用の質問紙調査を実施し、その解析を行った²⁾。

<倫理委員会整理番号：一般 2022-183>

IV 研究結果、考察及び今後の研究方針

令和4年度の「ぐるぐるプロジェクト」ラジエーションカレッジセミナーに参加した高校生の保護者4名へのインタビュー解析の結果から、小さい子供を持つ母親は、「放射線被ばくによる健康影響」に関する不安が大きいことが明らかになった。具体的に、遺伝的影響の不安が捨てきれないという母親もいれば、震災当時に3人目の子供を妊娠中であった母親は「小さい子には放射線被ばくによる何らかの影響が出る可能性がある」という認識を持っていた。また、セミナーに参加した子供の変化を親が捉え、親自身が子供から影響を受けていることが明らかになった。具体的に、震災当時福島県にいた母親は、『県民健康調査』の甲状腺検査自体の意味について息子と話し、検査・受診について初めて考える機会を持った」と話した。この結果から、セミナーを受けた生徒本人だけでなく、その内容を知った保護者にとって意識の変化があることが明らかとなった。

令和5年度に「ぐるぐるプロジェクト」ラジエーションカレッジセミナーを開催した、鹿児島情報高校での10人への教職員へのインタビューの解析から、(1)物理的な距離に連動する関心の低下(＝他人ごと)に伴う情報(不確かな／曖昧な知識)の固定化を払拭するための、情報のアップデートの必要性、(2)新たな科学的知識を知ることにより、それと差別・偏見との関連性に気づき、「自分ごと」として捉える可能性(3)教員という立場を活かして、自らが得られた知識・情報を様々な方面への共有・展開の可能性、が明らかとなった。

また、同10名へ実施した「放射線に対する意識を持つ人のセグメント分析用の質問紙調査」の解析結果から、セミナーの参加前後において、一部の参加者が属する「放射線に対する意識に係るセグメント」に変化があることが明らかとなった。また、セミナーの参加から4ヶ月後にも、セミナー前と比較して一部の参加者が属するセグメントの変化を確認した。加えて、「放射線被ばくによる遺伝的影響」の認識に関しては、セミナーの参加前後において大きく変化していることが明らかになった。また、セミナーの参加から4ヶ月後にも、多くの参加者において、その認識が維持されていることが明らかとなった。

今後の展開としては、インタビュー内容を精査して、セミナーの効果をより明確化するとともに、100人規模でのセミナーの開催前後での「放射線に対する意識を持つ人のセグメント分析用の質問紙調査」の実施により、大規模なn数での評価が必要になると考えられる。同時に、それを含めた未解析データの解析および論文化、そして国際雑誌への投稿を検討している。

V 結論

「ぐるぐるプロジェクト」ラジエーションカレッジセミナーを、高校生を対象として実施した場合、参加した高校生から親へのセミナーの話題の共有に伴い、家族の中での効果的な情報のアップデートがあることが明らかになった。それに伴い、親の意識・思考にも変化が生じることが確認された。

また、福島から1,000km以上離れた地域では、セミナーの開催によって参加者が持つ情報の大幅なアップデートがあることが明らかとなった。また、教員を対象とすることにより、多方面の関係者に

対して、教職員自らが発信する起点となる可能性があることが明らかとなった。

引用文献

- 1) 「原発事故被曝で「子孫に遺伝的影響」 4割が誤解」 2022年5月17日
<https://www.yomiuri.co.jp/national/20220517-OYT1T50036/>
- 2) Kei Hirai, Asayo Yamamura, Yuko Matsumura, Asako Miura, Ekou Yagi, Ryohei Fujino, Masaharu Tsubokura, Fumio Ohtaka, Segmentation of the general public according to differences in knowledge and beliefs about radiation-cluster analysis by attitude, knowledge, belief and anxiety, *Journal of Radiation Research*, Volume 65, Issue Supplement_1, December 2024, Pages i42–i51